

九州の蘭学・武雄の蘭学

安永3 (1774) 年の『解体新書』の訳述刊行により、新たに「蘭学」という言葉が生まれました。医学の分野で実用の学問、つまり実学としての西洋の学問「蘭学」の評価が高まった結果です。文化8 (1811) 年には、幕府自らも蛮書和解御用という蘭書の翻訳を専門に担当する部局を設けて「蘭学」の研究に乗り出すこととなったのです。

幕府が正式に「蘭学」を容認する少し前から、特に西国大名のなかに西洋の文物に興味を抱き、これを取り入れようとする者たちが現れました。平戸藩主松浦静山、薩摩藩主島津重豪、熊本藩主細川重賢、福岡藩主黒田斉清、豊前中津藩奥平昌鹿、また佐賀藩主の鍋島直正などで、いわゆる「蘭癖大名」と呼ばれる人たちです。

また、武雄でも鍋島茂義を中心として、天保年間(1830~44)から蘭学の導入が進められ、多くの文物がもたらされ、様々な取り組みも開始されました。

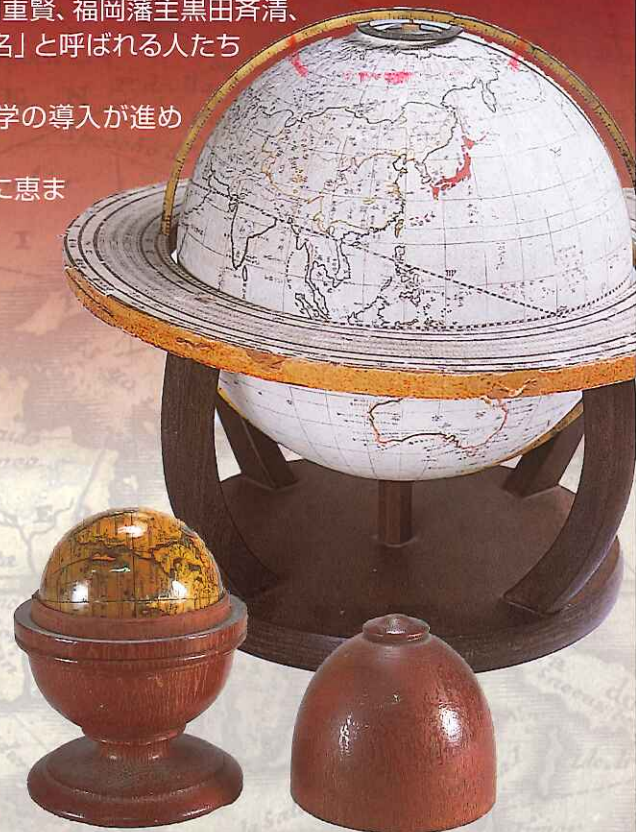
江戸時代、西洋に開かれた唯一の戸口である長崎に近いという、地理的に恵まれた九州の各地で、どのような蘭学導入の動きがみられたのかを眺めます。



帆足・吉雄両先生依ト医賢賢(大分県立先哲史料館)



伝 オランダ船
船首飾り(松浦史料博物館)



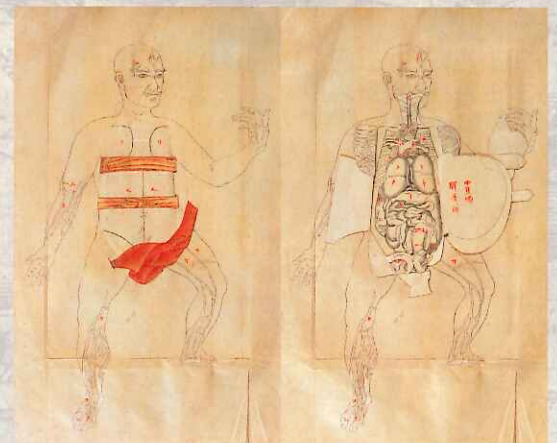
地球儀(尚古集成館)



梁付芙蓉手鳳凰文大皿(VOC)
(九州陶磁文化館)



精新儀(熊本市立熊本博物館)



原三信元弘訳述 人体解剖書(原三信病院)
*ただし、展示資料はレプリカ

武雄市図書館・歴史資料館

〒843-0022 佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304番地1
TEL 0954-28-9105 FAX 0954-28-9205

URL <http://www.epochal.city.takeo.lg.jp>
mail epochal@city.takeo.lg.jp

